

① 研究課題

脳卒中後の上肢運動障害における急性期作業療法

② 研究等の目的・概要

目的: 脳卒中急性期の上肢機能回復を目的とした通常のリハビリテーションに組み合わされた課題指向型アプローチに対し、神経発達学的治療(ボバースアプローチ)および知覚探索アプローチ(生態心理学的理論)による治療をそれぞれおこなうことにより、上肢機能の回復を促進させることに違いがあるのかどうかを明らかにすることです。

概要: リハビリテーション医学会において、急性期リハビリテーションのエビデンスはまだ蓄積段階です。とくに脳卒中後の上肢機能は、運動学習パラダイムに基づいた治療アプローチが採用されてきました。現在、急性期のリハビリテーションでは、従来のアプローチに加え、課題指向型アプローチが作業療法的手段として重要視されています。しかし、これまでの報告では、上肢の麻痺そのものの回復ではなく、代償機能の獲得も含まれており、真の機能回復とはいえないと否定的な意見もあります。

したがって、脳卒中急性期のリハビリテーションは、患者の長期的な潜在能力に大きく影響を与えますが、リハビリテーション医学会のエビデンス蓄積において上肢機能の回復を目的とした報告はまだ乏しいのが現状です。本研究では、従来のリハビリテーションに組み合わされた課題指向型アプローチに対し、ボバースアプローチ、知覚探索アプローチによる治療効果をケースコントロール研究として比較検証します。

研究デザイン: 観察研究(ケースコントロール)

研究の方向: 後ろ向き

③ 主任責任者

橋本市民病院 リハビリテーション科 作業療法士 佐藤 将人

④ 研究期間

2021年10月21日～

⑤ 研究等の対象、実施機関及び実施場所

対象: 2017年4月1日～2021年3月31日までに入院された脳血管疾患のリハビリテーション対象患者

選択基準: 初回脳卒中、上肢手に麻痺症状を有すること

除外基準: 脳損傷・てんかんなどによる脳血管疾患等リハビリテーション算定者、臨床評価を妨げる重度な認知機能障害を有すること、その他に深刻な医療が必要であること

実施機関: 橋本市民病院

実施場所: リハビリテーション室、作業療法エリア

⑥ 研究等における倫理的配慮、人権擁護及び個人情報の保護について

通常の臨床業務と同様の個人情報保護について、十分に配慮致します。

本研究で取得するデータは、患者ごとにすべて匿名化して個人のパソコンを使用し、別付けのハードディスクに保存します。

また、パソコン内にデータが残らないようにし、ハードディスクの保管は事務局の鍵がかかる保管庫に保管します。

⑦ 本研究に関するお問い合わせ先

橋本市民病院 診療技術部 リハビリテーション科 佐藤 将人 (TEL 0736-37-1200)